君はアイドル

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君はアイドル

【Ｎコード】
Ｎ８３２７Ｙ

【作者名】
レオ

【あらすじ】
星に誘われて、今、話題沸騰中のベルガク工房のコンサートに行くことになった癒菜。
コンサート会場はうるさくて、外に出た癒菜。
そこで、ある人に会って・・・？！

＊第1話＊（前書き）

連載2作目です♪
更新速度、遅くなったらすいません（汗）
第1話、ご覧くださいませ♪

登場人物
・東堂癒菜（とうどうゆな）・・・高2、クールな性格，
超がつく美少女。女優セシルの娘。
・星空季唯（せいくうきい）・・・高2、元気満タン。毎日ツインテールの
可愛い子。ベルガク工房とオシャレが大好き
・ベルガク工房のメンバー（計5人、全員高2）
☆折原零（おりはられい）・・・リーダー、俺様、ボーカル担
☆白田皇（しらたこう）・・・副リーダー、草食、ボーカル担、ギター担
☆仲居翔（なかいしょう）・・・メンバー、ムードメーカー、ドラム担
☆新井真（あらいしん）・・・メンバー、子供っぽい、ギター
☆井坂雷（いさからい）・・・メンバー、ドS、キーボード担
白田桐也（しらたきりや）・・・20歳、美人好き、癒菜大好き、人と比べると結構
なエロさ

＊第1話＊

「癒菜～ッッッ」
読書しているあたしに走って近付いてきたのは
ツインテールの可愛い女の子。
名前は星空季唯（せいくうきい）、高校2年生の元気満タンの子。
ちなみに、あたしは東堂癒菜（とうどうゆな）、高校2年生のよく
「クールね」って言われるような性格らしい。
「星（せい）、ドジして扱けたりしたら、危ないよ」
「大丈夫～！ったぁ！？、うわぁっ！！！」
ドスッと鈍い音がして、次には「いたぁっっ」って言う
星の声が聞こえた。
多分・・・いや。絶対にものすごく痛いと、思うんだけど
「予告したにも関わらず何やってんの・・・。」
「いやぁ、ごめんごめん～」とまぁ、確実に次は気をつけようとか
言う
注意書きは星の頭に無いみたいだね・・・（苦笑）
「あ！でさでさっ！癒菜、明日用事とかない！？」
「別にないよ」
「あのね！明日、ベルガク工房のコンサートだあるの！でね！
そのコンサートに、わたし、あたっちゃったんだぁ～！」
「そうなんだ、よかったね？」
別に特に興味をもっていない私からすれば
どれだけ親友でも正直どうでもよかったりする。
「本当によかったぁっ！あ、それでね！そのコンサートのチケット
2枚あるから
もう1枚癒菜にあげるからついてきてほしいのっ」
「は・・・？なんであたしまで・・・」
「いやぁ・・・ほら、私すぐ迷子になってなにがなんだかさっぱり

になっちゃって・・・」
「はぁ・・・。ほんと、世話の焼ける子ね？ま、いいよ、ついてってあげる」
「やったぁっっ！癒菜って本当いい人！最高！ダイスキッ」
そういってガバッと抱きついてきた
黒いツインテールがあたしの首に当ってくすぐったい
「星、くすぐったぁい・・・。つか、くるしぃぃっ」
首にがっしり手を絡ませてるもんだから、苦しくて仕方ない
「へへぇんっ掛かったなぁ～！」
「わ、わぁっかった！何をおのぞー・・・う・・・」
あたし、撃沈。
苦しすぎ・・・。
「あれ、癒菜がしんじゃったー（笑）」
「んもー・・・馬鹿星・・・星へ帰れーっ」
こんな感じで、あたしは明日、ベルガク工房のコンサートに行く事になった。

＊第2話＊（前書き）

第2話ご覧くださいませ♪

＊第2話＊

「癒菜、ごめぇーん！まったぁ～？」
「大丈夫、あたしも来たところだよ。」
「そっかぁ！じゃ、よかった！！さてと！いこっか！」

今日は星に誘われてベルガク工房のコンサートに行くんだけど
正直、興味ないあたしは多分詰まんない顔だと思う・・・
ま・・・星は素でぼけてるから気付いてないけどね

「ね！癒菜！今日の服どう思う？」
「ん？可愛いと思うよ？星っぽく、キュートだし」
「やっぱり？？よかったぁ！わざわざ買った意味アリアリだぁ～」
ニコニコしながら首をブンブンとなぜかふりながら
嬉しそうにしゃべる星。
まぁ・・・こう言うのがあるから、憎めない・・・んだよ
てか、隣にいるからそのツインテールがあって痛いんだけど・・・
「星、痛い」
「え？あははっ！ごめん～！てかさ、癒菜の服
クールで大人でいいなぁ～っ」
あたしの服を見て、うきゃきゃと喜ぶ星。
これのどこをみていいなぁと言ったのかさっぱりだ。
黒縁のダテめがねに制服のカッターシャツに縞模様のネクタイ
黒いスキニージーンズにハイヒール、髪の毛は下ろしたまま。
すごくすごくすごーく、普通なんだけど・・・
「しかもー！セクシィッッ」
星が目ハートにしながら、あたしの胸元をみた。
いつもの癖で、カッターシャツのボタンを４個目ぐらいまで留めて
いなかった。

まぁ、下着が見えるわけでもないけどさ
「これ、セクシィなの？と言うか、ついたけど・・・」
星がえ！？といわんばかりに振り向くと
案の定、人にぶつかるわけ・・・でね
「ご、ごめんなさい！」
「んも～、気をつけてね～？」
優しそうなおねぇさんだ。
ファッションは星と似てるかな？
「おねぇさん！その服、どこで買ったんですか！？」
「え・・・？これ、手作りよ？」
「そうなんですかぁ！？すごいすごーい！その作り方おしえてくださぁい～！」
おいおい・・・ここで言うか・・・
そんなもの断られるに決まって・・・
「いいわよ～！あなた、座席どこかしら？」
「アリーナ席の○－○です♪」
「あらぁ！私とお隣ね！ラッキーだわ～、あなたみたいな子が横で～！
さ！いきましょうか！」
「はい！癒菜、いこ！」
・・・・。
何故こうなったのかあたしには不明すぎる・・・。
星の人見知りしなさすぎる性格には「あ」もいえない・・・

会場に入ると、ざわざわ、がやがや、うるさいったら・・・
あたしはうるさいところが結構苦手・・・。
席に着くと、星と比奈さん（さっきのおねぇさん）は
すでに服のはなしとベルガク工房の話で大盛り上がりだ
「ごめん、星、あたし外のカフェにいるね？
コンサート始まってもこないかもしれないけど、放っておいていい

から」
「うん～わかった～！あ！それでね――――――」
なんて薄情な子だ・・・
まぁ、いいんだけどねぇ

外に出ると、もうほとんど人はいなくて
カフェなんて誰もいなかった。
「いらっしゃいませ、ご注文お決まりですか？」
「コーヒーのブラックで」
「かしこまりました」
やっぱりベルガク工房って人気あるね
えっとー・・・
メンバーは折原零（おりはられい）と白田皇（しらたこう）と仲居翔（なかいしょう）と
新井真（あらいしん）と井坂雷（いさからい）だったっけな？
で・・・星がすきなのが仲居翔君だっけ。
そういえば皆、高2なんだよね
なんか、高2でアイドルって多分、てか絶対すごい

こんな事を考えて、多分15分ぐらいたった頃だった
「君、コンサート会場に入らないの？」
不意に後ろで声が聞こえて振り返った
「中はうるさくって、外に出てきてるんです」
帽子を深く被ったその子は、男性なのにきれいな肌で
長身で、顔はアンマリ見えないけど、世間で言うイケメンと言うものだと思う
「え、じゃぁコンサート来てる意味って・・？」
「あぁ・・・、友だちが素ボケちゃんで、ドジだから
付き添いみたいなので来たんです。正直、あたしはベルガク工房に
興味無いんで・・・（苦笑）まぁ、大体のことは知ってますけど・・・って

なんか、すいません。（汗）」
やば・・・長くしゃべりすぎた・・・。
「そういう事ね・・・？って・・・これ零に知られたら、君えらい目にあうね・・・」
「零ってベルガク工房のリーダーですか？」
「うん、そうだよ。あ・・・てか、君僕の事誰かわかって・・・ないよね？」
「えぇ、まったく。まず顔、見えてませんし。」
「やっぱりね・・・ま、ファンとかじゃなさそうだから、バラしてもいいかな。」
そういうと、その男性は帽子をひょいと取り、机に置いた

「・・・・白田皇・・・？」
そのキレイな肌の男性は明らかにベルガク工房の副リーダー、白田皇だった。
「驚かないね？」
「え・・・えぇ、まぁ、ちょっと動揺してますけど・・・
てか、なんでいるんですか？後５分とかではじまるんじゃ・・・？」
「なんか今、トラぶってるみたいでね・・・？僕、そういうの苦手でさ」
「そうなんですか・・・なんか、テレビとは違いますね、やっぱり」
「え？そのやっぱりの意味はなに・・・？」
「ほら、テレビじゃドがつくＳですよね？ケド、今、Ｓでもなければ Ｍでもない
極普通の男の子って感じで。まぁ、テレビ見てたら大抵分かりますけどね？」
「ま・・・キャラ作ってるからね・・・？僕結構か弱いよ」
「男でもか弱いのは仕方ない事ですよ。と言うか、ソロソロいったほうがいいんじゃ？
もう２０分はたってるかと？」

あたしとしゃべってる間に実は時間は大いに過ぎていた
大丈夫なのか、あたしにはまったく不明で・・・
「そうだね、もう行こうかな。あぁ、ついでに、君も一緒に来て？」
「は・・・？なんであたしまで？！」
さすがにこの発言にはびっくりだ。
いきなり来いとか・・・つか、ついでってなに？！
「マネージャーにぴったしかと」
「はぁぁ？！」
「アイドルにはぁはないでしょうよ？」
なんか、皇君テレビキャラに戻ったし！
「あたし、一般客ですよ？てか、そっちのほうの資格とか・・・」
「大丈夫、資格なんて僕たちでごまかすし。んじゃぁ、行くぞ」
やばぁ。こいつまじでSだろ！！
「ちょ、まっ・・・・。もう・・・。」
あたしは諦めて、拒絶していた状態をやめて
渋々ついていく事した。

＊第3話＊（前書き）

第3話ご覧くださいませ♪

＊第3話＊

カフェであって、なぜかマネージャーに任命されて
つれてこられたところは、楽屋・・・らしい。
「ここが俺の楽屋。入って、ちょっとまっててて？」
「あぁ・・・はい」
楽屋全員別々なのか・・・。
恐るべし、ベルガク工房

部屋に入ると、何かすっごい普通の部屋なわけで・・・
ベットあるし、シャワー室あるし、キッチンまでも・・・
あぁ・・・そうか、ベルガク工房は一定の場所でしかコンサートし
ないんだっけ？
あたしは入ってすぐのところのドアに寄りかかって
また、本を読み出した。

タッタッタッタッタ・・・・・！！
ばんっ！
ドアが勢いよく開いたかと思うと
皇君が息を切らして、あたしに言った
「ごめん！なんか、トラブル酷いらしくて！解決したらすぐ始める
から
後・・・3時間、ぐらい待っててもらえる？！」
「あぁ・・・ハイ。」
「コレ、渡しとくから！コンサート見たかったらコレ、スタッフに
見せて？
誰か聞かれても、コレ見せて名前言ってね！それじゃ！」
ばしんっ！
今度は勢いよく閉まる。

・・・嵐だ・・・。
てか、別にこんなの無くてもいけるんだけどね・・・
あたしは仕方なく、皇君の部屋にあるソファーに座って
本を読み始めた。３時間か・・・５冊で足りるだろうか・・・（１
冊３０分）

１０分ぐらいたったときだった。
外から「みんなーっ！待たせたねっっ！！！」と言う声が聞こえた。

えーっと・・・始まったのか??
で、多分・・・この声はリーダーの零か
さすが、声通るね
声もキレイだし
歌手って感じするねー。

１時間ぐらいたった頃だろうか。
廊下から声がした
『翔～どこへいったんだぁぁっ』
この声、零君?
『なに?お前そんなに零が気になんの?』
『え、あぁ、まぁ・・・』
『零のくせして、きもちわりぃ』
『おま！てめぇの部屋も見んぞ！』
あたしの予想だと、これはコンサートでよくある
劇みたいなものかな。
声、大分通ってるみたいだし
会場と映像でつながってんだろな
あ・・・てか、今の状況だと
あと少しでココにくるわけだよね・・・?

って、どうすんの！！！！
・・・ココは、あたしの才能で切る抜けてやろうじゃない・・・！
あたしは、本を閉じ、カバンに入れて、カバンからめがねを取り出しかけて
ネクタイをきっちり締める。
「よーし。」
ドアを開けて、外にでる。
１ｍぐらい先に零君と皇君がいた。
皇君は目を見開いて、「なんで出てきてんの？！」みたいな顔をしている。
・・・あたしの才能嘗めないでいただきたいものだ

あたしはスタスタと歩いていき、カメラをよけて通りすぎた。
「おい！お前！誰だよ？！」
零君が声をかけた。
そりゃそうだ、知らないでしょうよ
「おはようございます、こちらのスタッフの東堂癒菜です。」
頭を下げてそこをさった。
これこそ、あたしの才能、「演劇」だ。
即興でやれといわれてもできるぐらいにはある。
なぜかって？まぁ・・・一応親は今人気の女優、芸名セシナ
本名東堂春千佳（とうどうはるちか）だからねぇ・・・。

舞台裏まで行くと、スタッフさんがこっちをみてぎょっとする。
これまぁ、当たり前だと思う。なにしろ、知らない人だし。
「ちょ、君！部外者は・・・！」
「セシルの娘です。」
「セシル・・・？って、え！？あの人気女優の？！」
「えぇ。」

「す、すいません！どうぞ、こちらに！」
「いえ、結構です。そこの近くで見せてもらいます」
ほらね、皇君に渡されたものなんて必要なし。
まぁ・・・あんま親の名って使いたくないんだけどね。

近くでみるものの、思う事は同じでね・・・
「やっぱり・・・うるさい・・・・」
はぁ・・・楽屋に戻りたい・・・・。
でも戻れる状況じゃないし・・・
皇君やらがココに戻ってきたら、そそくさと戻ってやる・・・

＊第４話＊（前書き）

第４話ご覧くださいませ♪

＊第４話＊

１０分ぐらいして、やっと皇君達は舞台裏のほうに戻ってきた。
もちろん、翔君を連れて。
カメラも回った状態だ

零君がこっちを見て、怪訝な顔をしたけど
あたしはニッコリ微笑んでペコリと頭を下げた。
翔君もこっちをみて目を見開いた。これもまぁ、何でいるの？的な奴ね・・・。
ま、今はスタッフ兼セシルの娘＝大物の子供＝大事な存在、だけどさ

皇君たちが舞台に戻って、あたしも楽屋に戻ろうとした。
が・・・そのとき、舞台から予想外に声が聞こえた
『翔も見つかった事だし！暇だから、美少女さがしでもしない？
会場の皆さんの中で！！！』
零君だ。
会場は『きゃぁぁぁぁ！！と嵐のような声が聞こえた
まぁ、ここまでは別に何と思わなかった
『俺かわいい子しってんでぇっ！今、つれてくる！！』
そういうと舞台裏にピョンピョンと来て
あたしの前までくると『来て！』と、ニコニコしながら言われた。
・・・は・・・？
何であたしなんだ・・・？
意味わかんないけど！？！？？
「な、なんであた・・・私なんでしょう？？？」
「かわいいから！ほら！はやく！」
そういってから耳元で「君、セシルさんの娘さん、だろ？」と囁いた。

・・・・なに、それ。
まぁいい、ここも演じるしか方法はない。

あたしはネクタイを緩め、ボタンも４つ目まではずすした
舞台に行くとまぁ、そこには「なんでおまえ！？」って言う零君と
「戻ってなかったのか？！」って言う皇君が・・・ね
まぁ、翔君はそんな事もお構いなしで
「セクシーで可愛い子でしょ！」
と、零君と会場に笑いかける。
会場はシー・・・ンとしている。
や、やばい・・・ここはもう、あたしの出る幕じゃないわ・・・。
「あたし、時間がないの。だから、ここら辺でおさらばします♪
ごめんなさいね、それではシィユゥアゲイン☆」
そういって、さり際に皇君に「ごめんなさい」といっておいた。

舞台裏に戻ると、あたしはスタッフの目にもくれず
カバンを取って、めがねをはずし、楽屋に戻った。

「はぁ・・・。もう、ココにはいちゃいけないかな（笑）」
楽屋に戻って、最初に呟いた言葉だった。
なんとなくだけどさ、いたら、いろんな人を困らせてしまいそうなんだ
あたしはメモ帳に『いらない事をしてごめんなさい。
マネージャーの件はお断りします。ありがとうございました。ｂｙ
癒菜』
と、書いた。
「名前・・・知らないけど、まぁ、いいかな」
あたしは、楽屋を出てさっきいたカフェとは反対側にあるカフェへ
行った。
そして、また、本を読む。

自分でも思った、なんて波乱万丈な展開なんだ・・・と。
正直言って、あたしはいつもこんな感じだ。
こんな感じで、最終的には人を困らせてしまう、最悪なんだ・・・

本を2冊、読み終えた頃だった。

リロリンリロリン♪
メールが来た。
「星じゃん」
メールを開くと、そこは、まぁ星らしいっちゃそうな内容なわけでね・・・
件名：ごっめーん！
本文：ごっめーん！あのね！おねぇさんと話盛り上がっちゃってさ！
コンサート終ったら、食事行こうって誘われちゃった！
だから、先に帰っててもいいでーすっ！ごめんね～
♪季唯♪

・・・・
結局そうなのね？
てか！来た意味ないじゃないか！！
・・・はぁ・・・。無意味すぎ・・・さいっあく・・・。
「お客様、ご注文・・・は・・・」
不意に店員さんの声が聞こえてあたしはケータイを落としそうになる。
「わわっ！す、すみません（汗）えっと、ブラックコーヒーで！」
「かしこまりました、お客様、なにかお悩みで？」
「え・・・あ、いやぁ・・・（笑）友だちの素ボケっぷりに絶句してて・・・」
「そうですかぁ（笑）でも、かわいらしいお友達みたいですね？」
「え？えぇ、まぁ・・・」

「そのストラップ、見たらなんとなくわかります」
店員さんがさしたのは、星とおそろいにした、クマが星(ほし)を持ってるストラップだった
「店員さん、エスパーみたいですね？」
「そうですか？見たら、わかりますよ？コーヒー、お持ちいたします」
そういって店員さんは奥に引いていった。
気さくな店員さんだなぁ・・・と思いながら、また、本を読む。

「コーヒーお持ちいたしました。ごゆっくり」
店員さんはにこっと笑ってまた奥へ引いていった。
ケータイを見て、あたしはびっくりした。
なにしろ、もう3時間ちょいはたっていたからだ。
「はやいなぁ・・・」
そう呟いたときだった。
「なにが早いのかなぁ？女優セシルの娘の東堂癒菜さん？」
後ろから声がした。
今度はまったく動揺もなかった。
・・・また、皇君の声だった。
「・・・セシルの娘ですが、なにか？」
あたしなりに答える
「マネージャーの件断るとか、できると思ってるのかな？」
「えぇ、まぁ。あたしの意思ですし」
「コンサートに乱入したくせに？」
「あれは翔君が悪いんですよ。」
「ま・・・なんでもいいけど、断る権利とか一切ないから」
「・・・なんであたしなんですか」
「美人だから。」
「はぁ？！それだけですかぁ？！」
「んまぁ・・・後は・・・秘密」

「はっ・・・とにかくお断り・・・」
「俺がお前を任命してやるよ」
あたしの言葉は、遠くから、だけど良く通る声で遮られた。
・・・零君だった

近くまで来ると、零君はニヤリと不適に笑い、あたしに告げた。
「お前、俺らの事興味ないんだってな？なら、お前が俺らの事が好き・・・いや
正確には俺の事が好きっていうまで、絶対話してやらねぇ」
・・・・・・。
意味がわからない。
興味ないけど、なぜあたしが零君のことを好きにならないといけないんだ？！
「ちょ、ちょっとまって？！意味わかんないって！」
「だーから、俺の事すきになるまで、まねやらせるってわけだよ。
こんな美人が俺に興味ないとか、まじ許せないし？」
「・・・・色々おかしいし間違ってるけど訂正しなくていいんだね？」
「あぁ、別に間違ってない」
「ちょっとまって、一つ訂正させて。あたし、美人じゃないし。」
「そこは一番訂正しなくていいところだし。まーとりあえず、こい」
無理矢理腕を捕まれて、また楽屋のほうに連れて行かれる。
「まってって！あたしが行ってもいいこと起こらないし！」
「いいから、こい。否定権ないから」
零君ってむっちゃ俺様！？

もうっっ！
無理矢理すぎなんだし！！！

＊第5話＊（前書き）

第5話ご覧くださいませ♪

＊第5話＊

「改めて見ると、マジで美人だな？」
「ほんと・・・僕もココまで美人は見たことないわ・・・」
「俺が見込んだとおりだけど、すごいな・・・」
「つか、皇、ココまでの美人さんどこで！？」
「さすが女優セシルの娘だ・・・」
あたしを見ながら口々に言うこの人たちは馬鹿じゃないのか？
てか・・・
「女優セシルの娘ってのやめてください。」
「なんで？いいじゃん」
「あたし、別にあんな人親とか思ってないから。
ていうか、1年に1回帰ってくるかも分からない人を親と呼べますか？」
「え、まじで？」
「えぇ、まじで」
「ま！いいじゃん！今日から俺らが家族だからさ！」
「んまぁ、そういうことになるよな？当分家には帰れないと思えよ」
「てか、お引越ししちゃったほうがはやいんじゃ？」
「あぁ、そうだな？」
「ちょっとまってよ！？あたし、引越しする気とかないし？！
第一、家出たいとか思ってないしっ」
「強制的にそうなるから。言っただろ？俺の事好きになるまで、離せネェって」
「ふっざけんなぁっ！まねなんて適当にいるだろっ」
「いや・・・実は俺らここ2ヶ月はマネいないんだよね」
「は！？」
「いや・・・・なんか、やめちゃってね」
「あのマネはちょっと酷かったよな」

・・・・・・・
なんか、そのマネさんがやめる理由が分かる気がする。
ご臨終です、元マネさん。
って、そうなればあたしもこっからご臨終人生ってわけ?!
「はぁ・・・・なんか今から憂鬱・・・なんですが・・・・」
「まぁまぁ、仕方ないよ。癒菜、兄妹兄弟姉妹あり?」
「大学生の兄が・・・・」
「おぉ・・・さぞイケメンで・・・・」
「だろうな、女優セシ・・・っつ!?」
あたしは雷君の言動を胸倉を掴んで遮った
「金輪際、母の名前を出さないで。てか、あの人は母親じゃないから」
凄い剣幕だったんだろう。
雷君は凄く目を見開いていた。
「・・・・ごめん」
「分かってもらえればいいんです。んで、兄がどうか?」
「あぁ、いや。兄弟がいるなら、そこは許可取っとかないとと思ってね?」
皇君の発言に零君以外の人は頭にハテナを載せた。
「アレ。てか、お父さんにすれば・・?」
「阿呆。セ・・・・癒菜のお父さんは病気で亡くなってるよ」
「え・・・・あ・・・・・あぁ・・・・」
父さんのことでそこまで動揺しないでほしいんだけど・・・
別に、まったくもって気にしていない。正直父さんとの記憶なんてない。
父さんも有名俳優だった。だけど、まだ若いのにがんでなくなってしまった。
名前は東堂郁兎、３５歳で死亡。
あたしはまだ小さくて、ほぼ記憶なし。

「とりあえず、お兄さんに電話して？引越しの人に来てもらうから」
「あぁ・・・別にあたし取りに行きますけど・・・」
なんの裏もなく言ったつもりだったけど、
零君にはまぁ・・・伝わらなかった様子で・・・
「途中で逃げたりすると面倒だから、センターの人にきてもらう。
ほら、早く電話しろ。」
「なっ・・・・。分かりましたよ！んも・・・」
にぃちゃんは2コールほどで出た。
いつもながら、はやい。

『もしもし？ゆー？」
「にぃちゃん、こんな時間にごめん。今、大丈夫？」
『ん？全然構わないよ？今休憩中だから』
「そっか、あのさ、本題なんだけどさ。にぃちゃんさ今人気急上昇中の人気高校生アイドル
ベルガク工房って知ってる？」
『知ってるよ～？今、大学でも人気急上昇中』
「そ、そうなのね・・・・（笑）でね・・・今日、
あたしコンサートに行って、カクガクシカジカ・・・ってワケで・・・
なぜかマネに任命されちゃったわけなんだけど・・・」
『それまた、おめでたいな？』
「どこが！！！！」
『色々と。』
「んもー・・・。まぁ、それでさ引越しをしろといわれてるんだけど・・・」
『え、まじで！？』
「えぇ、大マジですとも。で、今から引越しの人らを向かわすとかほざいてるんだけど」
『・・・・べつにいいけど・・・母さんみたいには、なんなよ・・

？』
にぃちゃんもやっぱりそこは気にする・・・よね
「うん、少なくっても月一回は戻るよ？うん、ありがとうね。
次数学？そっか、頑張ってね！また明日！」

「・・・・てことです。引越しの人に言っておいてください。
あたしの部屋以外触らないでって。あたしの部屋のドアに『癒菜』
ってプレートが
掛かってるから、分かると思う。」
「わかった。零、電話よろしく」
「わぁった・・・。あぁ、引越しセンター？俺、零だけど。
今からっと、癒菜、住所は？」
「えっと、ＯＯＯ×××△△☆☆☆☆？－？－？」
「らしいから、そこの家に入って癒菜の部屋のもんだけ
俺らの家に持ってきて。うん、そう、あぁ、後、癒菜の部屋以外触
らないように。
常識だと思うけどさ。ん、んじゃ、よろしく」
何て適当な・・・
別にいいけどさ・・・その人ら、知り合いだよね？
知り合いじゃなかったらやばいよ。本間に。
「そーれじゃ、家かえろーか」
「んまぁにぃ・・・今日は疲れた・・・」
「皇のにぃちゃん、今日は車回してくれる？」
「あぁ、外で待ってる。あ・・・そーいえば出待ちの子、今日もい
るか？」
「おーってことは、いきなりマネ参上？！」
「え・・・まじですか」
「大マジだよ？ちなみに、俺らはサインすべて拒否、握手もすべて
拒否。
警備員は一応配置してるけど、それでも前に出てくる非常識が多く

存在するから
そこは俺らのまもれよ？」
・・・・こいつ、どこまでいっても俺様か。
まぁいい、やってやろうじゃないか
「はいはい、ベルガク工房様のお通りですか」
「マァ、そんな感じ」
「んじゃ、いきますよ。用意してきてください」
「「「「「「へぇーい」」」」」」
みんな、各自自分の楽屋に戻ると、スグに荷物を持って廊下に出てきた。
あたしはめがねをかけ、ネクタイをきっちりしめて、髪をポニーテイルにする
「おぉ、マネっぽい」
「マネですから」
「あぁ、そうか」
「そんな感じしないな～」
「あんたらが任命したんでしょ！」
「「「「「ばれた？」」」」」
ほんまなんだ、このひとら・・・

外に出ると、出待ちの子がまぁ、余裕で１００人は・・・
「きゃぁぁぁぁぁ！！！！！」と言う声とともにどんどん前へ出てくる。
警備員さんもほぼ止められていない。
「ベルガク工房にすかれたいのなら、行儀よく待つのが常識です。」
あたしは大きな声でそう、述べるよ皆あたしをみて「あんた何様？！」とか
口々に言い出した。
なんじゃこいつら！腹立つは！！！
「ベルガク工房のマネージャーをさせていただいています、東堂癒

菜と申します。
はい！そこのいて！時間が無駄！！！」
あたしは手でファンを押さえて、後ろのベルガク工房のメンバーを通す。
ハァ・・・面倒くさい・・・

車にたどり着き、ドアを開けて入れる。
これって警備員の役目だった気がするのはあたしだけ？

あたしは助手席に乗り込み、すぐ車を出してもらった。
「お疲れ様～って、アレ、君誰？」
「今日からベルガク工房のマネージャーをさせていただきます、東堂癒菜です。
よろしくお願いします」
「ほぉ～？歳いくつ？」
「１６です」
「高２？」
「はい」
「じゃぁ、この後ろの猿といっしょじゃん」
「そうですね、てか猿って・・・」
「いいのいいの、つーか、それよりさ・・・」
信号で止まった瞬間、あたしは皇君のお兄さんに引き寄せられていた
「スゲェ可愛いよな？てか、美人」
そういって、顔を近づけたと思うと、唇に体温を感じた。
「？！」
「にぃさん！！！！！？？？？？？？」
「桐也さん！！！？？！？！」
「なぁぁぁぁ！？？！！？」
「桐っちぃぃぃ！？！！？」
「なにしてんですかぁ！？」

キキキキス？！！！？！？！？！？！？？！！！？？！？！？

「ん・・・はぁ・・・・何してんですか？！」

「キスだよ？」

「にぃさん！そのエロい性格どうにかできないの？！」

「んー、無理。おっと、信号青だ」

車を愉快に走り出す桐也さんを見ながらあたしは

この先を結構心配していたり・・・・する

＊第６話＊（前書き）

第６話ご覧くださいませ♪

＊第６話＊

さっきの事件から約１０分後。
「おーっしっ！ついた！」
と桐也さん・・・が声をかけた。
あたしは車から降りて、後ろのドアを開けた。
「癒菜さんきゅ」
「癒菜ちゃん、ありがとう」
「ゆーさんどーもっ」
「あんがとーっっと」
「どーもっ」
口々に車から出て行く。そして・・・あたしの丁度後ろに広がる
この上でかい建物はあったか・・・と思うほどの
豪邸にむかって歩いていく。
それをみてふと思う。

・・・皆やっぱ格好良いよね・・・？
てか、あたりまえ？だよね・・・（笑）

「桐也さん、ありがとうございました」と
そそくさとその場を立ち去ろうとしたら、また腕を捕まれて引き寄せられた。
「あんな猿に教われんじゃネェよ？」
と言って、ニッコリ笑ってあたしを解放した。
・・・えぇ・・・それだけであぁですか。
てか襲われる？零君とかが？
「あぁ・・・ないない」
あたしなんかが襲われるとか、ありえないでしょ（笑）

あたしも豪邸に入っていった。
・・・中は・・・まぁ、思ったとおりありえないでかさなわけでさ・・・
真っ白な猫足のソファーが４つとか・・・てかシャンデリアって・・・
「でかいなぁ・・・。迷いそう」
「そうか？女優セシルの娘なら・・・あっ！」
雷君はまた口を滑らせて、セシルの名前を出した。
・・・・。
「別にいいですけど・・・連呼とかしたら、アイドルでもなんでも八つ裂きにしますよ」
「おぉ、こぇ～！まぁいいけど？正味、女に代わりはないわけだしこういう風に！」
「へ？うわっ」
気付くとあたしはあの豪華な真っ白いソファーに
雷君が上にいる状態になってるわけで・・・・（＝押し倒されてます）
「襲う事なんてちょちょいのちょいってわけ」
ニヤリ・・・と笑う雷君が不気味に感じられた。
「い、いや！ちょ、ちょっと！」
顔を近づける雷君にあたしはためらうばかり。
って、あたりまえでじゃないか？！
そんな事を思ってると、また手を引っ張られた。
と、思えば体が浮いて気付けば次は誰かの腕の中・・・
「癒菜はてめぇのもんじゃないから」
零君だった。
「零のもんでもないだろーが」
「俺のもんだし」
「おいおい、そこの二人。癒菜ちゃんはダレのもんでもないと思うんだけど？」

「いーや！ダレのものってわけじゃなくて、みんなのもん！」
と言うと、真君が零君を軽く突き飛ばして、あたしの後ろから抱きついた。
「ぬわっ！っと、真君っ」
「みんなのもんだもーん、俺のもんだもーん」
・・・まさかのこの子は素でこれなのか？！
素って怖いな・・・なんて思ってると
「おまえらなぁ～！俺にもわたせっ」
とか言って、次は翔君の腕の中。
「たくっ！それじゃぁぼくのものでもあるよな！」
次は皇君の腕の中。
「ちょ、ちょっと、ま、まって」
「待たないよ、皆本気だと思うから」
皇君をみると意外と真剣な表情（意外とは余計。）
「な、なにに本気？！」
「「「「「全員お前に惚れたって意味」」」」」
・・・・
えと・・・・。
あなた様たちは今、なんとおっしゃったんでしょうか・・・？
「癒菜、お前理解してないだろ」
「えぇ、まったくもって」
「だと思った・・・。まぁ、簡単に言えば全員が全員癒菜に一目ぼれしたってワケ」
「へぇ、そうなんだー」とかいえるはずもなく
あたしはただポカン・・・と・・・
「てか！皇！その手を離せ！」
あたしの肩を抱いていた手をちょっぷして
真君がまた抱きついてきた。
「ほんと・・・真って子供みたいだな」
「俺まだ高校生だもん。十分子供！」

「はいはい、そうだったな。てか、お前も離れろ幼稚園児！」
次は零君がバシッと真君の頭をはたく。
「それじゃ癒菜をお部屋にご案内ってことで、行くぞ」
零君がこの展開から、また冷静に戻って言ってくるものだから
あたしは「え？」と聞き返してしまった。
「え・・・って、くっ・・・！気が動転してるのは分かるけど・・・
とりあえず、ついてこいって。迷子になんぞ？」
と零君はあたしの腕を掴んで早足で歩き出した。
後ろではわぁわぁとまぁ、犬がいっぱい・・・
桐也さん・・・猿じゃぁなくて犬ね、うん

廊下を3分ぐらい歩いた頃。いきなり零君の背中が止まって
あたしはぶつかってしまった。
「っ・・・す、すいません」
「別にそんな事で謝らなくて良い。癒菜、あいつらにも俺にも気を
つけろよ」
「へ・・・？何を・・・・？」
「色々とだ。俺らは他の奴らと違って、忙しかったりなんかすると
急激に食2割・睡眠2割・性欲6割に増加するからな？」
・・・人間の三大欲求ってわけか・・・
「んと・・・気をつける」
「ん、そうしろ。ほら、ここ。癒菜の部屋。疲れてたら寝てていい
から。
晩御飯は俺が作るし」
「あ・・・うん、ありがとう。ごめん」
「いいんだよ。別に。俺らが巻き込んだ事だ、じゃぁな」
方向を転換してあたしにセを向けて、手をヒラヒラとしてさってい
く零君。
・・・・なんか、意外と優しい？

あたしは部屋に入ると、目を見開いた。
「・・・お姫様の部屋みたいだ・・・」
あたしの部屋になったとこは、ベットに天蓋がついているような
本気で本当のお姫様の部屋のようだった。
「・・・てか・・・広いなぁ？！」
にぃちゃんと住んでたとこの
リビングほどはあるな・・・（アパートだけどねぇ）
あたしはベットに座って、ため息一つ。
「はぁ・・・。疲れた・・・。」
この言葉であたしはこてん・・・とベットに転がり
いつのまにか眠ってしまった。

ーｒｅｉー
ＰＭ７：００
「そろそろ癒菜ちゃん、誰か起こしてこいよ」
「んじゃ、俺行ってくる。」
「襲うなよ？！」
「襲うか、ばぁか」

俺は癒菜の部屋に向かった。
一応説明しとくけど・・・
癒菜の母親と俺の父親は・・・不倫関係にいた。
いや、現在続いてる状態だから関係にいる、が正解だ
俺はそれをうんともすんとも言わずに
ただただ耐えているだけだった。
癒菜の父親が病死ってのは嘘・・・らしかった。
後余命３ヶ月は残っていたのに、急に誰にも見取られず死んだらし
い。
俺の母親に聞くと（俺の母親は歌手）アレは俺の父親が・・・
・・・点滴を全部とって、挙句の果てには口元を押さえつけた・・・

簡単に言えば、殺人だ。殺人。
動機はどうやら、不倫がばれないように・・・らしかった。
だから、俺は癒菜が心配だった。
それを癒菜が知っているのならば
こんなところ居たいわけがない。

コンコンッ
「癒菜？晩御飯、出来たから呼びにきたんだけど」
・・・返事無し・・・っと
ほったらかしってのも酷いよな・・・
入るか・・・でも、鍵閉まってるか・・・
一応ドアノブを回す。と、まぁ、極普通にカチャッとドアがあいたわけで・・・
「無用心にもほどがあるだろう・・・！」
俺が呟いても起きる気配はなかった。
・・・やっぱ、疲れたよな・・・？
「癒菜、晩御飯・・・っ・・・」
俺は癒菜の寝顔を見て、赤面中・・・
ば、ばか！俺！・・・まぁ・・・

スキなのに変わりはない・・・から・・・な
「襲うなよ？！」って言われたが・・・
襲わずにられない・・・状況ってか・・・
つーか、癒菜のこの無防備が悪いんだよっ
「ばーか・・・。」
額に一つキスを落として、癒菜を揺さぶって起こした。
－ｒｅｉ．ｅｎｄ－

「ん・・・・。」
「晩御飯だけど？」

「あ・・・うん、今行く・・・・」
あたし爆睡したんだっけ・・・
あぁ・・・見出しもぐっちゃぐちゃ・・・どうしよかな（笑）
「ごめん・・・。先行ってて？髪ぐちゃぐちゃだし、後で行く」
「別にいいっての。ほら、髪の毛下ろしてネクタイ外して・・・」
零君がポニーテイルしていたゴムとネクタイをスルリと外した。
「ほれ、いくぞ」
「あ、はい！」

やっぱり、零君って優しいよね？

＊第7話＊（前書き）

第7話ご覧くださいませ♪

＊第7話＊

「ふぁぁぁ・・・」
「無理矢理起こして悪かったな」
「いやいや、起こしてもらえなかったら明日の
朝まで熟睡でしたよ」
零君と並びながらリビング（正確には大広間みたいなもん）にむかった、
「んまぁ、マネはマネで大変だからな。休める時は
やすんどかねぇとな」
「そういうもんなんですかね？
まぁ・・・お手柔らかに」
「それは俺らの仕事上にいるスタッフやらプロデュにいってくれ」
「そうですね」
こんな他愛のない話をしながら。

「癒菜つれてきたぞ」
「あーお帰りー」
「疲れてるのにごめんね」
「ほらほらーここすわれーっ」
「はよ飯食おうぜー」
あれ・・・・。
なんかみんな、仕事の時より優しい・・・？
「どうした？んなとこで突っ立ってないで座れって」
「あ、はいはい。ごめんなさい」
「ゆーちゃんこっち！」
と、あたしは真君に促されて席についた。
「今日、なに？」
「ホワイトシチューだよ」

「おっしゃぁいっ！皇のシチュー様じゃぃ！」
「おい・・・それ、皇様のシチューじゃぃにしてくれないか・・・」
「別に皇はどうってことないだろ」
「ひっでぇー！」
シチューを運びながら飛び交う会話に
あたしは思わず笑ってしまった。
「くっ・・・はははっ！！」
「何がおかしい？」
「い、いや、だって！すごい言い合いだな、って思って」
「こんなん日常茶判事だっての」
「そうそう。ほら、飯食おうぜ」

「「「「うぃーす。いっただきゃーす」」」」
「いただきます」
「いただきます・・・。」
シチューはすごく美味しくて、すぐに飲んでしまった。
横にあったサラダとかも新鮮で美味しかった。

「ご馳走様でした」
「癒菜ちゃん、はやいね？美味しかった？」
あたしは満面の笑みで
「すっごく美味しかったですよ」
と答えた。すると皇君はなぜか瞬時に顔を背けて
「よ、よかった・・・・」とごちょごちょ言っていた。

「それじゃぁ、あたし部屋にいるんで
なにかやれってことがあったら何でもいってください」
「癒菜さんきゅ」
「いえいえ」
あたしは部屋に戻った。

―ｒｅｉ―
「ごっそさん」
「はぁ、腹いっぱいだわ～」
「意外とふくれるもんだな」
「だな」
「癒菜も喜んでたし、よかったじゃん」
皆口々に感想やらなんやら言ってソファーに寝そべったり座ったりする。
俺はと言うと、癒菜が色々と気になって仕方がない。

疲れてるだろうな・・・
ちゃんとねてっかな・・・？
あ、でも起きてるか・・・！
あの事知ってんのかな・・・

こんな事をずっとずっと・・・
「おい～？零？お前が癒菜ちゃんがかわいいと思うとこ、どこだよ？」
「は？俺？なんで俺まで」
「強制参加なんだよ、ほらはよう吐け！」
「あぁ・・・美少女で心優しいところとかじゃねぇの？」
「やっぱみんな一緒だな！さっすが癒菜！」
「ゆーちゃんやるね！」

本当はこのメンバーの中の誰にも触らせたりしたくなんてない。
桐也さんがキスをしたときは正直いつも以上にあせったものだ。
（桐也はマネになったこ全員にアレをしている）
俺は人一倍独占欲が強い。それは自分でも自覚してるわけだしけど、癒菜はこの独占欲のほかに、俺が幸せにしたいと思うんだ

あったのは今日。セシルの娘だってのをしったのも今日。
だけど、それを聞いて癒菜を幸せにしたいと思った。
おかしいかもしれないが、そうおもったんだから仕方がない。

「ね！！今から癒菜襲いにいかねぇ？」
「おーっいいね～！」
「俺ら男子はそういうために生きてるのと一緒だしな」
「いいねぇ～！」
「お、おい！？お前ら、それはヤバイんじゃねぇか？？？」
「えぇ？大丈夫だよ？手荒な扱いはしないよーっと
それじゃ、いきますか！」
「よしよしいこいこ」
ランランと癒菜の部屋に向かうこいつらの背中をみて
俺は寒気を感じた。

・・・・やばい・・・・！！！

―ｒｅｉ―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8327y/

君はアイドル

2011年12月3日23時50分発行